

プラネタリウム・クリエイター 大平 貴之氏に聞く

聞き手 草野 満代 ● キャスター

幼少時代から好奇心旺盛

大平 学生時代に私が作ったプラネタリウムが初めてテレビで取り上げられたとき、そのニュースを読んでくださったのが草野さんなんですよ。

草野 そうでしたか。一九九一年から九三年まで三年間朝のニュースを担当していたので、その時期ですね。

そんなに早くからプラネタリウムを作り始めていらつしやつたのですか。

大平 さかのぼると子どものころからポール紙で簡単なものは作っていたのですが、学生のころに初めてレンズを使ったわりと大がかりなものを作りました。

草野 研究のテーマもプラネタリウムだったのですか。

大平 プラネタリウムは学業とは別にやっていたのですが、卒業論文のテーマはプラネタリウムにしてみました。

大学の先生に、ここまで一生懸命やったのだから、卒業論文のテーマにすればどう

かと言ってもらって。

草野 いつごろからプラネタリウムに興味をもたれたのですか。

大平 それがどうも肝心なところの記憶がスポンと抜けているのですが、小さいころからモノを作るのは好きでしたね。

子どものころはとにかくいろいろなモノを作ったり、植物に興味をもったり、電車が好きだったこともあったし、アニメを作ったこともありました。

鉱物を集めたり、写真に興味をもったときには、自分の部屋に暗室を作りました。

ロケットの打ち上げに夢中になっていたこともありました。

ただロケットの打ち上げは危険なもので、続けていたら別の形でニュースで読んでいただくことになっていたかもしれません(笑)。

そんなことをやっているうちに、だんだんとプラネタリウムに絞られてきたといえますか、やることが大がかりになると、そうたくさんいろいろなことはできなくなりますよね。



大平 貴之氏



草野 満代さん

草野 星と結びつくような体験があったのですか。

大平 それがそういうわけでもないんです。子どものころもいまも、それほど星のきれいな場所に住んでいるわけではないです。あの星空が忘れられなくて、という話があればいいのですが(笑)。

草野 学生時代はまじめに研究生活を送っていらしたんですね(笑)。

大平 まじめという表現があたっているかどうかはわかりませんが、はたから見ればまじめに映ったでしょうね。生産工学部という理系の学部だったので、周りの友達もまじめな人が多かったです。

私の場合とはかくプラネタリウムを作ることが自分の生活の中心で、それに没頭した学生生活でした。

プラネタリウムの魅力

草野 何がそこまで大平さんを夢中にさせたのでしょうかね。

大平 プラネタリウムをなぜ好きになっ

たのかはよく覚えていないのですが、いまの自分の理解では、いろいろなことに興味をもったうちのたまたま一つだったのですが、子どものころにいろいろ興味をもった技術を集大成できることでしょうか。プラネタリウムを作るには、電気も機械工学も光学も必要です。

さらに上映するとなると、シナリオを書いたり音楽を選んだり、演出も必要になりますが、小学生のころから漫画を描くのが好きだったので、そういうことも生かせました。自分でナレーションをして星の説明もできましたしね。そしてその作品は老若男女だれでも対象になります。

ほとんどの技術というのは一般の人にはなかなか理解できないと思うのですよ。けれどもプラネタリウムというのは、技術と一般の人との距離が非常に近いといえますか、直接お客さんの目に触れますよね。そういう点では、エンターテインメント性もあり、自己満足に終わりません。

そして、自分のやってきたことが認められるとやはりうれしいですね。人に理解

されて受け入れられる喜びもありました。

あと、理系の学部は男ばかりなんですよ。ずっと男子校育ちで理系の大学へ入ってしまったので、プラネタリウムを完成させれば横の広がりもできるかと(笑)。

草野 女の子にもてる(笑)。

大平 もてるかどうかはともかく、その一歩手前ですよ。とりあえず出会いをつくる(笑)。

本当に女の子が周りにいなかったんですよ。日本大学は学部によって場所がばらばらなので、生産工学部は男子学生ばかりだったんです。

最近芸術学部に行くと機会があるのですが、同じ大学とは思えないです(笑)。

草野 華やかで。

大平 プラネタリウムを作るうえで生産工学部という学部はすごくよかったですけれどね。

大学もすごく協力してくれて、場所を提供してくれたり機械を貸してくれたり、とてもありがたかったです。

草野 「メガスター」という大ヒット商

品が生まれて、家で楽しめるプラネタリウムも開発されましたね。

大ヒット商品

「メガスター」と「ホームスター」

大平 家庭用の「ホームスター」ですね。あれは私が最初に作ろうと考えたのではなく、玩具メーカーの方から協力してもらえないかと話があったんです。

私も個人的にはこういうものは大好きですが、好きだからこそ客観的に考えることができなくて、一般の人がどのくらい買ってくれるかというのは正直見当がつかまらなかったんです。ですから売れるかどうか不安だったのですが、予想以上の反響に驚きました。

「ホームスター」もこれからどんどんやっついていくと思うのですが、業務用の「メガスター」のほうは、いま実際に見られる場所というところ、お台場の日本科学未来館と川崎市青少年科学館と二カ所しかありません。それをもっとたくさんの方に提供したいというのが次の大きな目標です。

もっと小型化して科学館や学校に置いてもらいやすいように開発したり、あとはいま「メガスターⅡ」があるのですが、世界最高性能の「メガスターⅢ」を開発して、川崎の科学館のリニューアルに合わせて納める予定になっています。三年計画でいまからぼちぼち始めています。

草野 長期スパンなんです。

大平 いままではずいぶんめまぐるしくて、三年ぐらいの長期スパンでの開発というのはなかなかできなかったのですが、私の中でも非常に貴重な機会になっています。斬新で画期的なものがないか、いまみんな考えているところです。

草野 大平さんご自身は、一番好きな星は何ですか。

大平 やはりオリオン座ですね。三つの星がきれいに並んでいるのは本当に不思議です。

草野 どんな素人でもどこからでもすぐ

にわかるし、私もオリオン座は大好きです。

大平 しかもちょうど正確に真東から昇り、真西に沈むんです。あの三つの星がち

ようどそういう位置にあるというのは、自然界のいたずらにはできすぎだなどという気がします。

草野 そうですよ、遠く離れた地球から見ているのに。

大平 でも本当は宇宙空間では三つ並んでいるわけではなくて、距離もまちなんですけれどね。違った角度から見ると全然三つに並んでいないんです。

草野 先月アフリカのタンザニアに行つたのですが、南半球からはオリオン座が逆に見えるんですね。すごく不思議な感じでした。

大平 南半球へ行くと、日本から見えるものがすべて逆に見えます。

草野 星を見るだけで、遠く離れていても同じ地球にいるんだとか、つながっているんだなと思えますから、改めて星っていいなと思いました。

大平 確かに全然違う土地へ行くと、地上の風景とか空気とか、住んでいる人も違いますが、その中で星というのは、世界中どこへ行ってもシェアできるものですよ。

プラネタリウムを軸に広がる世界

草野 一日の生活スタイルはどのような感じですか。

大平 取材等の予定がなければ、朝から会社に行つて、最近ではコンピュータの仕事が多いです。図面を書いたり、シミュレーションしたり、あとは実験をしています。

それからプラネタリウムを上映するとなるとCGが必要ですので、CGをつくつたりもしています。

この間は宇宙センターをテーマにした番組をつくつたので、種子島までヘリコプターを飛ばして、ハイビジョンのカメラで撮影して編集しました。

草野 子どものときにいろいろなものに興味があつて、最終的にプラネタリウムに集約されたとおっしゃいましたが、それがいま、こうしてまた広がっていますよね。

大平 たぶん欲張りなんです。プラネタリウムというのはニッチな産業であるわりに、いろいろなことをやらせてくれるもの

でもあるんです。機械のことをやったり、番組をつくつたり、いろいろな人に出会ったり。

草野 テレビコマーシャルに出たりとか。
大平 あれもおもしろかったですね。何回も何回も同じことをやるんですね。やはりああいう現場でもついで裏方を見てしまえます。

草野 自分はこの先プラネタリウムをやつていくのだと決意されたのはいつごろなのですか。

大平 実は職業にするという意識はあまりなくて、なし崩し的にこまできたという感じなんです。

プラネタリウムを作ることは決めているのですが、人生の選択、例えば学校に入るとか、会社を選ぶといったところではけっこう周りに流されているところがあります。

日本大学の附属中学・高校に行つていたので、そのまま日本大学の理系の学部に進学して、理系だから大学院ぐらい行つておこうという雰囲気になつて、何となく大学

院に行つて。

それで就職となったときに、プラネタリウムで食べていけるような感覚もなかった。で、エンジンアだから精密機械か家電メーカーがいいなど、自由闊達で愉快的な企業はどこかと考えて、じゃあソニーに行つておくかという感じでここまでできたのです。

ただ、プラネタリウムをずっとやり続けてきて、それがだんだん自分でも知らないうちに大きなものになってくると、ニーズが生まれてきますから、それを少しずつ仕事にし始めると、どうしても昼間の仕事と逆転する瞬間がくるんですね。

それで会社を離れて、気がついたらここで仕事をしているという、そんな感覚なんです。

趣味からプロの仕事へ

草野 そうなることを予感したというか、確信したのはいつの時点ですか。

大平 とりあえず本業にした瞬間というのは、会社を離れて独立した瞬間ですよ。

草野 会社員のころはいろいろなことをやらなくてはいけないですよ。

大平 会社の仕事の本業という意識はあったんです。プラネタリウムは自分が作りたいから作っていただけで、会社は腰掛けでいつか独立するぞなどと考えてたわけはありません。

ところがプラネタリウムが評価されて、では上映しましょうということになれば、もうプロなわけです。

こちらが会社で仕事をしていても、「メガスター」を大きなイベントで貸し出すとなると、相手は仕事でそれをやっているわけですから。

草野 そのときは大平さんの中では副業という意識だったのですか。

大平 副業という言葉で意識していたかどうかはともかく、いま振り返ると明らかに副業でした。収入もありましたし。

プロがアマチュアかというのは、自分に対しての責任と、社会に対しての責任があると思うんです。

自分に対しての責任という意味では、ソ

ニーにいれば給料が入ってくるので、プラネタリウム製作はやめようと思えばいつでもという点ではプロではないわけです。

けれども、もう一つの社会に対する責任という点では、「メガスター」を貸し出す相手は仕事でやっているの、無責任なことではできないわけです。そういう意味では、半分はプロの側面をもっていたわけです。

だから、例えばプラネタリウムを貸し出して上映すると、昼間に仕事をしていても電話がかかってくるんですよ。「電源が入りませんがどうしましょう」とか。

草野 「メガスター」関係の電話が。

大平 昼間に仕事をしているときに電話がかかってくるけど、会社の仕事があるのでうまく対応できないんですよ。これはとても困りますね。そういうこともあって、独立を考えるようになりました。

草野 大学を卒業したときに、プラネタリウムを製作している会社に就職しようとは思わなかったのですか。

大平 思いませんでしたね。自分でプラ

ネタリウムを作っているということは、も
うすでに自分流ができあがっているわけ
ですよ。一方で既存のプラネタリウムを作
っている会社でもノウハウはもっているはず
です。

そうすると、せっかくゼロから自分で
ノウハウを育ててきたのに、既存の会社に入
ってしまつと、その会社のノウハウと混ざ
って、自分でやってきたことがオリジナ
ルではなくなると思いました。

草野 一般化してしまつてもいい。

大平 そうですね。そこはやはり自分流
を大切にしたいと思いました。

草野 それが結果的によかつたのでし
ょうね。

大平 それは間違いなくよかつたです
ね。もし入っていたらと思うと、ちよつと想像
がつかみません。

星の数、個人の力

草野 いくつかあるプラネタリウムと大
平さんのプラネタリウムは、何が違ったか

らこんなに多くの人々に受け入れられたの
だと思いませんか。

大平 まずプラネタリウムの製造メーカ
ーとしては、国内に大手のメーカーが二つ
あります。大手と言つても業界が小さいの
で百人規模ですが、二大メーカーがあつて
そこに大平貴之というごく小さな存在がい
るわけです。

世界で言うと、アメリカやロシアとい
う大国があつて、南太平洋の小さな島が突
然大きなことをやつてしまつたという、そん
な感覚なんです。プラネタリウム業界の方
も非常にびつくりしたと思います。

ではなぜ受け入れられたかと言つと、逆
にこれは私のほうが聞きたいぐらいなので
すが、私が考えるところでは、持ち運びが
できることと、星の数が従来に比べて百倍
以上あることではないかと思つています。

数というのは、比較の尺度としてはわか
りやすいですからね。従来の数万個に対し
て数百万個の星を表現したこと。しかも個
人が作つたということも、取り上げられや
すい要素だつたと思つています。

「メガスター」をもし普通の企業が作つ
ても、こんなことにはならなかつたのでは
ないか、とはよく言われますから。

プラネタリウムの世界は本当にいろいろ
なしがらみが多くて、メーカーは民間企業
ですけれども、ユーザーとのつながりがあ
るので、ユーザーの意識にすごく縛られる
ところがあります。

ユーザーというところをだいたい科学館とか自
治体の施設です。そうするとその自治体の
ミッションがあつて、例えば、理科教育な
どの目的に限定しなければプラネタリウム
というのは使えません。

ところが、私の場合は個人でやってきた
ので、何をやつても自由なわけです。プラ
ネタリウムというのは扱ふ免許はいりませ
んから、例えば渋谷のセンター街にもつて
いつて上映してもいいわけですが、ほかの
プラネタリウムはそういうことはやろうと
思つてもなかなかできません。

場所を選ばず精神的にも縛りがなとい
うのが、とてもよかつたのではないかとい
う気はします。

草野 小さいゆえのメリット、個人ゆえ

のメリットですね。

そのほかに、ご自身でも感じていらつしやると思いますが、技術的なことを超えて、何かほかとは違う心に響くものがあるのでしようね。

大平 そうですね。その点は私が言うのも何ですが、私のプラネタリウムにみんなが心を動かしてくれたということだと思っております。

見えない星がつくりだす

星空の質感

大平 その要因も二つあって、一つは、作った星空そのものです。星の数が従来の何百倍になったというのはいすごくインパクトがあるようで、実は「メガスター」で付け加えたのは、肉眼で見えない星なんです。つまり肉眼で見える星はせいぜい数千個しかなくて、それはほかのプラネタリウムでも変わりません。つまり差は大きいようで小さいわけです。

その差というのは、業界のプロにはわか

るけれど、一般の人にはなかなかわからなわけではないかという意見がけっこうあったんです。私もそこはファイフティ・ファイフティに考えていて、ただ、世間の人に受け入れられようと思って作ったわけではなく、とにかく私がこれを作りたいから作っただけですよ。

それが実際に世の中に送り出してみると、すごくアートの見方をされたと言いますか、肉眼では見えない星を出すことによつて表現できた星空の質感というのが、まさに人の感性に響いたようです。特に表現活動をしている人からはすごく反響がありました。

草野 いままでにない感覚を味わったのでしようね。

大平 星空の質感というのは、たぶんいままでのプラネタリウムで提示しきれなかったのではしようね。

私もすごく驚いたのですが、天文学の知識がなくても、本当に世間の人の目というのは鋭いなあと感じました。

草野 そこに物語性やドラマ性も加わっ

たわけですね。

大平 そうですね、「小さいころの夢を実現してきた」というように。「夢はかなう」というメッセージと私のやっていることをつなげて表現されることはよくあります。

ただ、そうすると「大平さんを見習って夢をもつように」という方向に話が進みがちなのですが、私はそれにはちよつと反対なんです。

夢をもつて何か特定のことをやるというのは、特定の特技をもつた、ごくひと握りの人間のやることのような気がするんです。でも、自分で夢を実現していく人もいれば、自分の夢がなくても、例えば周りの人と仲よくしたり、家族をすごく大事にしたり、人を支えたり、まとめたり、そういういろいろな立場の人がいるから世の中はバランスがとれるのだと思います。

みんながみんな自分の夢を追求したら、たぶん世の中壊れてしまいますよな。

ですから私の例をとつて、「おまえたちも夢を見るように」という方向にもつていられるのは反対なんです。

私はこういう人間だけれども、もっと多様な考え方を認めてあげるほうが大事なかと最近思います。そういう話を最近若い人に話す機会が増えたのですが、その話は響くところがあるみたいです。

夢はなくても大丈夫

草野 いま若い人たちにおつしやいましたけれど、私たちが学生だったときよりもずっと簡単にたくさん情報が手に入る中で、自分らしさということを考えると、逆にすごく難しい時代なのだろうなと思います。そういう中で大学生に贈るメッセージはありますか。

大平 月並みですが、例えば「夢を見ろ」ということにしてもそうですし、誰かの考えやどこかでつくられた価値観に縛られすぎず、焦らずやっていくのがいいのではないかと思います。

草野 学生時代にしておいたほうがいいことはありますか。

大平 個人的に言うとも英語ですが、英語

にしてもそうですが、コモンセンスというのはすごく大事だと思うのです。

人との接し方や社会のルールなどは、人間として学ばなければならぬ必修科目だと思います。私はその辺りができていないこともあって、反省することが多いですね。

草野 大平さんはやりたいことがそのまます事に結びついた方だと思うのですが、自分が何に向いているのかわからなくて迷っている若者は多いのではないかと思います。

大平 見つけられなくてもいいと思うのですよ。たぶんそれでも本当に自分に向かない仕事であれば続かないと思いますし、最終的には、はまるころにはまるような気がするんです。

ですから、「ああ、おれは夢のない人間だ」という強迫観念にとらわれなくてもいいと思うんです。

草野 でも一つ好きなことがあるというのは、幸せなことではありますね。何でもいいのです。

大平 まあ、幸せは幸せですよ。でも

夢が見つからない、何をしていいかわからないという人が不幸かというとそうではなくて、その人なりに、逆に私の手に入らないものを手に入れていることもあるでしょうし、人それぞれなのではないでしょうか。ただ、一つのことを追求するほうが、マスコミには取り上げられますよね。そのぐらいいいことなんです(笑)。

私からすれば、周りに気配りをききちんとして、それこそサークルなんかで仲よくやっているのは、いいなあ、うらやましいなあと思いますよ。

私が技術のことで悩んでいるときに、ほかの人は人間関係とか、あるいは夢を見つけないことに悩んでいるかもしれませんが、悩むことによって必ず成長するわけで、みんな等しく二十四時間与えられている中で、考えたりもがたりしていれば、必ず何か見つかると思います。

草野 これからの活躍を期待しています。今日はありがとうございました。

(二〇〇八・四・八 ANAインターコンチネンタルホテル東京)